

スポーツクライマーのスポーツ価値意識

Awareness of Sport Values among Sport Climbers

羽 鎌 田 直 人 HAKAMADA, Naoto

立教大学大学院 コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 博士課程前期課程1年

キーワード：スポーツクライミング、スポーツ価値意識、禁欲志向、即時志向

Recently, Sport Climbing has been gaining popularity in Japan. Many people are interested in this sport and the number of sport climbers has increased. However, there is very little research about sport climbing, especially studies on the awareness of sport climbers. The purpose of this study was thus to clarify the trend of sport climber's value consciousness based on Uesugi's scheme (1985). The data were obtained by questionnaires, filled out by 139 sport climbers. From these, it is clear that many sport climbers tend to do sport climbing in an ascetic manner that is normally found in the top rate athletes, and there is less tendency to regard sport climbing as a leisure or recreational sport. Result of this study suggests that sport climbing has come into fashion but is not established as a familiar sport.

I. 研究目的

近年、スポーツクライミングは2020年夏季オリンピックの追加候補種目に選定されたことなどから大きな注目を集めている。国内の民間クライミング施設数を報告したウェブサイトによると¹⁾、2015年12月時点でその数は399となっており、2008年の同時期と比べ約4倍となっている。また、国内におけるスポーツクライミングの競技人口は、50.2万人と推定されており、柔道よりも約10万人少なく、トライアスロンよりも約10万人多いとされている²⁾。

このように、スポーツクライミングはスポーツ種目として人気が高まっているものの、それが競技スポーツとして定着しつつあるのか、それとも気軽に行うことができるレジャースポーツとして認識されているのかどうか不明であり、その取り組み方や価値観も多様であると考

えられる。このスポーツに関する先行研究は、手指の障害に着目した研究^{3,4)}やトレーニングやコンディショニング、パフォーマンス要因に関する意識調査⁵⁻⁷⁾が中心となっている。そこで、本稿では、スポーツクライマーがどのような認識でこのスポーツに取り組んでいるかをスポーツ価値意識(スポーツ観)から検討し、スポーツクライミングの今後の普及の一助とすることを目的とする。

II. 方法

1. 対象と方法

被験者は、都内民間クライミング施設の来場者および市民大会参加者、連盟主催の医科学研究会参加者の合計139名のスポーツクライマーで、調査票によってデータを収集した。有効回答者の年齢および性別の内訳は表1の通りである。

表1 有効回答者内訳

年齢	男性	女性	n
0～9	1 (1.2)	0 (0.0)	1 (0.7)
10～19	28 (32.6)	24 (46.2)	52 (37.7)
20～29	21 (24.4)	5 (9.6)	26 (18.8)
30～39	17 (19.8)	7 (13.5)	24 (17.4)
40～49	12 (14.0)	8 (15.4)	20 (14.5)
50～59	6 (7.0)	7 (13.5)	13 (9.4)
60～69	1 (1.2)	0 (0.0)	1 (0.7)
70～79	0 (0.0)	1 (1.9)	1 (0.7)
n	86 (100.0)	52 (100.0)	138 (100.0)

N.A.=1

2. 調査項目

調査項目は、①リードとボルダリングのオンサイトグレードおよびレッドポイントグレード、②アウトドアクライミングの経験の有無、③スポーツクライミング競技会への参加経験の有無に加え、上杉が作成した「スポーツ価値意識に関する調査票」⁸⁾の質問項目を採用した。

3. 分析枠組

上杉⁸⁾は、スポーツへの取り組みとスポーツの意義づけという二つの価値基準によって構築される「スポーツ価値意識の四類型モデル」を提唱した。スポーツへの取り組み方には、「勝利や記録をめざして禁欲的に自己の能力をたかめるのか、それとも今の自己の能力にあわせて気軽にスポーツを楽しむか」という価値基準があり、それぞれ「禁欲性」志向および「即時性」志向と呼ばれている。一方、スポーツの意義づけには、「外在的目的の達成をめざしてスポーツを行うか、それともスポーツ行為それ自体を目的とするか」という価値基準があり、それぞれ「手段性」志向および「自己目的性」志向とされている。これら二つの価値基準を軸とし、四つのスポーツ価値意識の類型を示したものが図1である。

本研究では、「スポーツ価値意識の四類型モデル」および被験者のスポーツクライミングの経験に関する基本的なデータを検討し、スポーツ

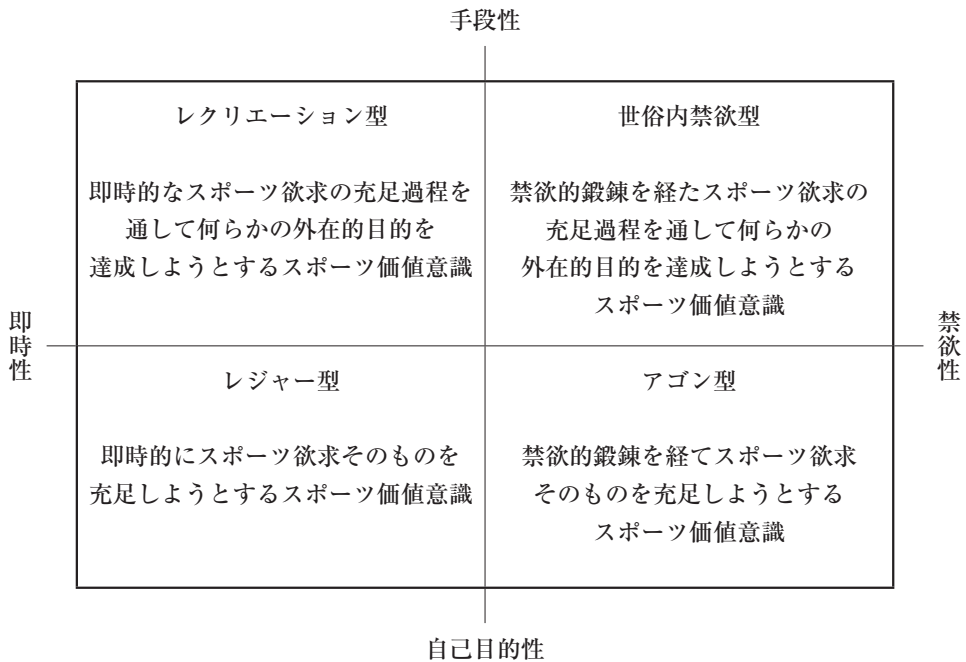


図1 スポーツ価値意識の四類型 (上杉、1985)

クライマーの価値意識を明らかにした。

尚、本研究は立教大学コミュニティ福祉学部・研究科倫理指針に準拠したものである。(承認番号 2015-009)

III. 結果

図2および図3は、各スポーツクライマーのリードとボルダリングのオンサイトグレードおよびレッドポイントグレードの相関を示したものである。オンサイトグレードおよびレッドポイントグレードのそれぞれにおいて、リードとボルダリングの間には有意な正の相関が認められた。リードのグレードは、国際山岳連合医療部会および国際スポーツクライミング連盟医療部会が定める「標準化クライミンググレード照合表」⁹⁾を用いて各個人のグレードを換算した。

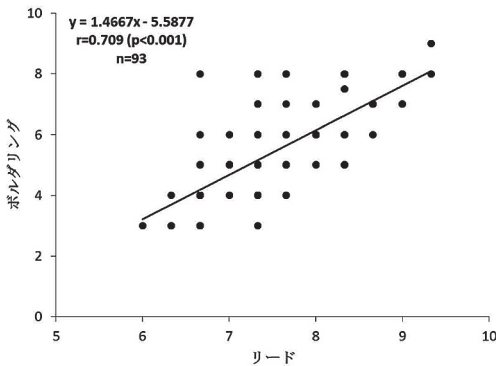


図2 リードとボルダリングのオンサイトグレードの相関

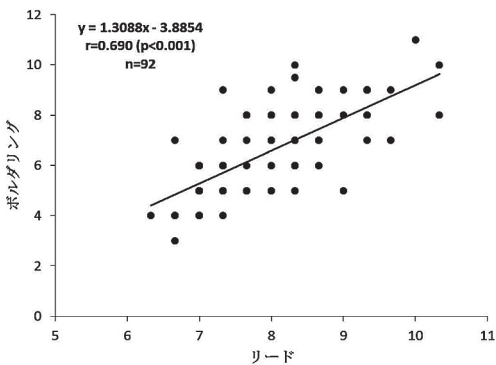


図3 リードとボルダリングのレッドポイントグレードの相関

また、ボルダリングのグレードは「標準化クライミンググレード照合表」で定められていないため、表2の照合表を作成し数値化した。

表2 ボルダリンググレード照合表

グレード	スケール
7級	1
6級	2
5級	3
4級	4
3級	5
2級	6
1級	7
初段	8
二段	9
三段	10
四段	11

人工的に合板等で作製されたクライミングウォールを登るのではなく、自然の岩壁を登るといったアウトドアでのクライミング経験の有無をまとめたものが表3である。アウトドアクライミングの経験の有無に関する内訳は、「経験あり」が90名(男性60名、女性30名)で、被験者の約6割に相当する。「経験なし」は49名(男性26名、女性23名)だったが、表4に示すようにアウトドアクライミングを経験したいと答える被験者が8割を超えた。

表3 アウトドアクライミングの経験

	男性	女性	n
経験あり	60 (69.8)	30 (56.4)	90 (64.7)
経験なし	26 (30.2)	23 (43.4)	49 (35.3)
n	86 (100.0)	53 (100.0)	139 (100.0)

表4 アウトドアクライミング未経験者内訳
質問：今後、アウトドアでのクライミングをしてみたいですか。

	男性	女性	n
はい	22 (84.6)	17 (81.0)	39 (83.0)
いいえ	3 (11.5)	4 (19.0)	7 (14.9)
n	25 (100.0)	21 (100.0)	46 (100.0)

N.A.=3

一方、スポーツクライミング競技会への参加経験を集計したものが表5である。競技会への参加経験の有無に関する内訳は、「経験あり」が94名（男性58名、女性36名）で、被験者の7割弱となった。「経験なし」は45名（男性28名、女性17名）で、表6に示すように、その中で競技会への参加経験を希望する被験者は半数に満たなかった。

図4は、「禁欲性—即時性」および「手段性—自己目的性」という二つの尺度から設定した質問項目に、「強くそう思う」と答えた場合に5点、「そう思う」に4点、「どちらともいえない」に3点、「そう思わない」に2点、「全くそう思わない」に1点を与え、横軸を「禁欲性—即時性」の次元、縦軸を「手段性—自己目的性」の次元

とし、各個人のそれぞれの尺度の合計点を座標点としてプロットしたものである。平均点は、「禁欲性—即時性」尺度で42.12点、「手段性—自

表5 競技会への参加経験

	男性	女性	n
経験あり	58 (67.4)	36 (67.9)	94 (67.6)
経験なし	28 (32.6)	17 (32.1)	45 (32.4)
n	86 (100.0)	53 (100.0)	139 (100.0)

表6 競技会未経験者内訳

質問：競技会・大会に参加してみたいですか。

	男性	女性	n
はい	15 (57.7)	4 (23.5)	19 (44.2)
いいえ	11 (42.3)	13 (76.5)	24 (55.8)
n	26 (100.0)	17 (100.0)	43 (100.0)

N.A.=2

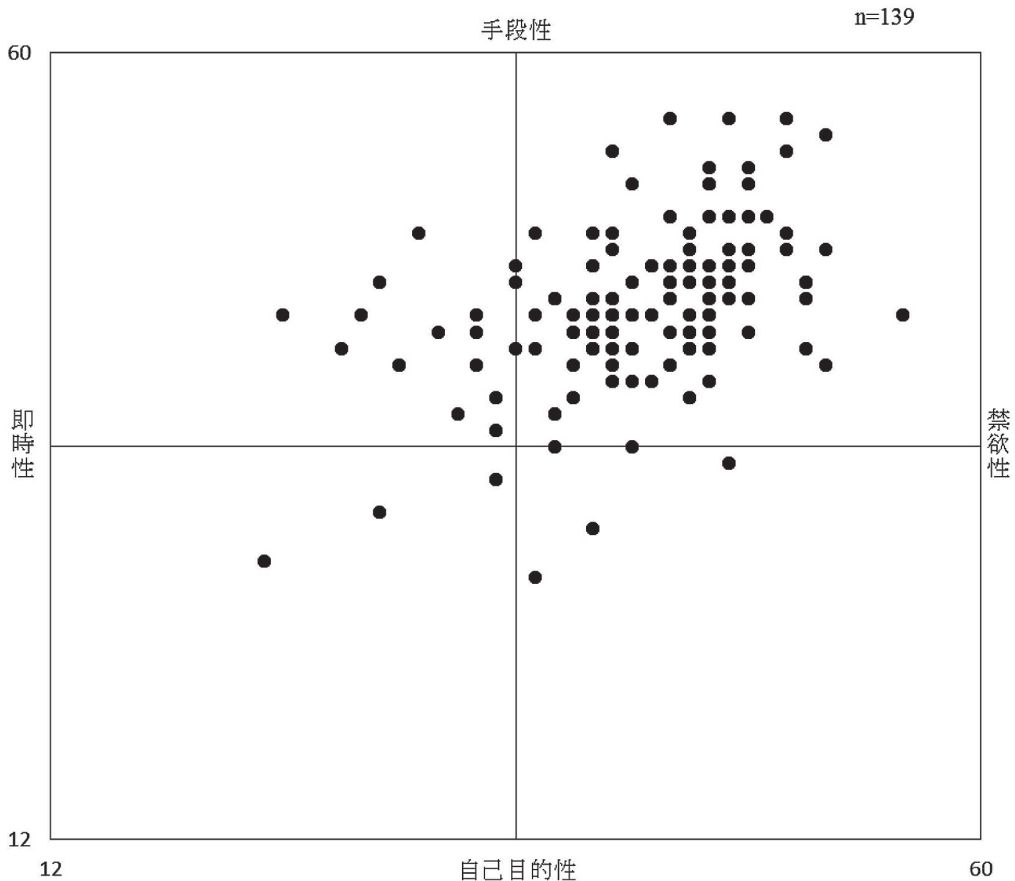


図4 スポーツクライマーのスポーツ価値意識

表7 スポーツクライマーのスポーツ価値意識

	n
世俗内禁欲型	115 (82.7)
レクリエーション型	13 (9.4)
レジャー型	3 (2.2)
アゴン型	3 (2.2)
中間型	5 (3.6)
n	139 (100.0)

表8 経験の有無別の意識比較 (1)

	n	禁-即	手-目
アウトドア (有)	90	41.23	43.97
アウトドア (無)	49	43.73	45.41
	<i>t</i> 検定	*	
競技会 (有)	94	43.66	45.00
競技会 (無)	45	38.89	43.38
	<i>t</i> 検定	***	

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

表9 経験の有無別の意識比較 (2)

	n	禁-即	手-目
(1) アウトドア、競技会共に経験あり	59	42.86	44.36
(2) アウトドアのみ経験あり	31	38.13	43.23
(3) 競技会のみ経験あり	35	45.00	46.09
(4) アウトドア、競技会共に経験なし	14	40.57	43.71
<i>t</i> 検定 (1)-(2)		***	
(2)-(3)		***	*
(1)-(3)		*	

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$ *** $p < 0.001$

己目的性」尺度で44.47点となった。スポーツ価値意識の各類型別に集計したものが表7で、「世俗内禁欲型」が82.7%となり最も割合の高い類型となった。尚、どちらかの尺度で中点である36点となった被験者については、各類型にあてはめることができないため「中間型」として扱った。

表8は、スポーツ価値意識をアウトドアクライミングおよび競技会参加の経験の有無別で検討したものである。アウトドアでのクライミングの経験の有無および競技会への参加経験の有無のいずれの場合も「禁欲性-即時性」尺度において有意な差がみられ、アウトドアでの経験を有しない場合と競技会経験を有する場合に「禁欲性」志向が高くなった。一方、「手段性-自己目的性」尺度においては、いずれの場合も有意な差はみられなかった。

被験者の中には、アウトドアクライミングの経験および競技会への参加経験の両方を持ち合わせている被験者群とどちらか一方の経験を有

する被験者群、どちらの経験も有しない被験者群が存在する。これらの4つの被験者群の価値意識を比較したものが表9である。それぞれの尺度における各群の平均点は、競技会への参加経験のみ有する群 (n=35) が45.00点と46.09点で最も高く、アウトドアクライミングの経験のみ有する群 (n=31) が38.13点と43.23点で最も低かった。各群の各尺度における平均点を比較すると、「禁欲性-即時性」尺度においては、アウトドアクライミングの経験および競技会への参加経験を共に有しない群を除いたすべての群の平均点に有意な差がみられた。「手段性-自己目的性」尺度では、アウトドアクライミングの経験のみ有する群と競技会への参加経験のみ有する群との間にのみ有意な差がみられた。

IV. 考察

今回の調査では、被験者の8割以上が禁欲的な努力を重視しており、その大半が「世俗内禁欲型」志向を持ってスポーツクライミングに取

り組んでいることが明らかになった。上杉¹⁰⁾は、一流アスリートは「世俗内禁欲型」に一元化され、地域スポーツ参加者は「レクリエーション型」もしくは「レジャー型」に分類されるとしているが、本研究において大多数のスポーツクライマーがアウトドアクライミングを中心に行う非競技者を含めて「世俗内禁欲型」に分類された。これは、アウトドアクライミングが競技ではないにもかかわらず、その経験者は競技者と類似の価値意識を持っている興味深いアクティビティといえることができる。

また、「禁欲性—即時性」尺度に着目すると、禁欲的なスポーツクライマーの中でも、アウトドアでのクライミングの経験がなく、競技会への参加経験を有するスポーツクライマーは特に高い値を示したが、競技会とアウトドアクライミング両方の経験を有するスポーツクライマー、そして競技会への参加経験がなくアウトドアクライミングの経験のみ有するスポーツクライマーの順に平均値が低くなり、それぞれの値に有意な差がみられた。このことは、スポーツクライマー全体として禁欲性志向が強くと「世俗内禁欲型」に属しているものの、その内部では競技志向を持つ者ほど、より禁欲性が高くなり、一流アスリートの価値意識に類似することを示している。同時に、アウトドアでのクライミングを行うスポーツクライマーは、禁欲性志向を持つものの、競技者のそれよりは弱く、より自分の力量にあったアクティビティを行いたいという志向が強いといえる。

その一方で、今回の調査では地域スポーツ参加者に多いとされるスポーツ欲求そのものを満たそうとする「レクリエーション型」および「レジャー型」の価値意識はほとんどみられなかった。このことから、現時点ではスポーツクライミングの人気の高まっているものの地域スポーツのような身近なスポーツにはまだなっていないことが示唆される。

V. まとめ

本研究では、139名のスポーツクライマーを対象に、スポーツ価値意識を調査した。その結果、全体の傾向として禁欲的に努力し勝利を目的としつつ、自らのためになる何かを手に入れようとする「世俗内禁欲」型の価値意識がスポーツクライマーにみられた。特に、「禁欲性—即時性」尺度においては、競技志向のスポーツクライマーはそうでないスポーツクライマーに比べて禁欲志向が強い傾向がみられた。

その一方で、今回の調査でスポーツクライミングは人気が高まっているものの地域スポーツのような身近なスポーツとはなっていないことが示唆された。今後のスポーツクライミングの普及、発展には地域スポーツとして定着させることが重要になってくる。今回の調査結果を踏まえて、スポーツクライミングの地域スポーツ化に関する方策を考えることが必要ではないだろうか。

【参考文献】

- 1) BOLLOG [ボルログ] ボルダリング総合情報 (<http://bouldering-log.com/>) (2015/12/16アクセス)
- 2) 水村信二・羽鎌田直人・西谷善子：スポーツクライミング競技における公共施設の重要性、明治大学教養論集通巻509号、2015、pp.91-116
- 3) 大森薫雄・角田元：クライマーのスポーツ障害を防ぐ、登山医学25、2005、pp.41-45
- 4) 西谷善子・小西由里子：クライマーにおける手指の変形について、登山医学26、2006、pp.69-74
- 5) 西谷善子・川原貴・山本正嘉：ジュニアクライマーのトレーニング、コンディショニング、障害に関する実態調査、登山医学29、2009、pp.215-221
- 6) 西谷善子・川原貴・山本正嘉：ジュニアクライマーおよびその指導者のコンディショニングに関

- する実態調査、登山医学30、2010、pp.97-104
- 7) 西谷善子・川原貴・山本正嘉：ジュニアクライマーを対象としたパフォーマンス要因に関する実態調査、登山医学31、2011、pp.200-206
 - 8) 上杉正幸：大学生のスポーツ価値意識について (4) 一価値意識の類型化一、香川大学教育学部研究報告 I 64、1985、pp.167-181
 - 9) Schöffl V, Morrison A, Hefti U, Schwarz U, Küpper T : The UIAA/IFSC Medical Commission Injury Classification for Mountaineering and Climbing Sports, OFFICIAL STANDARDS OF THE UIAA MEDICAL COMMISSION VOL: 17、2010
 - 10) 上杉正幸：スポーツ価値意識のパターンとその既定要因に関する研究、昭和62・63・平成元年度科学研究費補助金(一般C)研究成果報告書、1990